

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 元 年 6 月 27 日現在

機関番号：37602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04515

研究課題名(和文) 中学校における教育実習の多様性と教員としての資質能力形成に果たす影響に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the varieties of the Teacher Practice and their effects on developing Practical Qualities and Competencies at junior high school.

研究代表者

櫻田 裕美子 (SAKURADA, YUMIKO)

宮崎産業経営大学・法学部・准教授

研究者番号：70389576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、一般大学学部の中学校での教育実習を対象とし1)教育実習生の実習期間中における他者との関わり、2)教育実習の多様性及び教員としての資質能力の形成に与える影響について明らかにすることである。

分析の結果、1)指導教員に加え、その他の教員も指導に関わっていること、2)授業実習やSHR・LHRの時間数、授業実習以外の活動頻度などで多様性が高いこと、さらに実習生が教育実習を通して身につける能力にばらつきがあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国公立大学の一般学部及び私立大学の教職課程(以下、「一般大学学部」)における中学校での教育実習を扱った本研究の成果の学術的意義は、これまで教員養成系大学学部の附属小学校中心だった教育実習研究の偏りは正に貢献したことにある。

また一般大学学部における中学校の教育実習の多様性や実習生が実習を通して身につけたと考える事項についての検討から、従来ブラックボックス化されていた教育実習の実態とその効果を明らかにしたことに社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study tries to clarify the following two significant points through the examination of teaching practice at some universities having no departments of education. The one is the relationship between student teachers and others during teaching practice, and the other is about the varieties and their effects on developing practical qualities and competencies. The results of this analysis are summarized as follows: (1)Not only supervisors but other member of teachers might have chances to instruct student teachers.(2)There is a noted difference in the number of teaching, SHR, and LHR, moreover, a high activity frequency will be produced, except for teaching practice. Finally, there also exists various abilities that student teachers should acquire throughout teaching practice.

研究分野：教員養成

キーワード：教育実習 教員養成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19（共通）

## 1．研究開始当初の背景

現在、学校を取り巻く様々な課題へ対応するために、教員の資質能力の向上が求められ、教員養成制度にも改革が求められている。教員養成段階においては、教育実習が教員に必要な力量の形成に、限りはあるとしても一定程度有効なことは広く知られている。

先行研究においても、教員養成における教育実習経験の効果が明らかになっている。例えば、山崎は教育実習が教職意識に影響を与えることを指摘している（山崎準二，2002『教師のライフコース研究』創風社）。しかしこれまでの研究の多くは、教育実習前後の変化を捉えるだけで、どのような要因が変化に影響を与えるのかについては明らかにしてこなかった。このような状況下、近年、教育実習中に関わる他者との関係性に着目した研究も散見するようになった。一例を挙げれば、米沢は、教育実習生が身につけた力量と指導教員の指導的かかわりの関連を検討し、指導教員の指導的な関わりが教師としての力量形成にプラスの影響を与えていることを明らかにしている（米沢崇，2008「実習生の力量形成に関する一考察 - 実習校指導教員の指導的かかわりとの関連を中心に - 」『日本教師教育学会年報』第 17 号，pp.94-103）。これまでブラックボックスとなっていた教育実習の活動の中身に焦点をあてて、成果との関連性を検討する視点は、教育実習研究の展開をもたらすだけでなく、教育実習の質保証に多大な示唆を与えるものである。

しかし、先行研究には課題も残されている。教員養成は、開放制の原則の下、教員養成大学学部のみならず国公立大学の一般学部及び私立大学の教職課程（以下、「一般大学学部」）でも実施される。これら一般大学学部での教育実習は実習生の母校、または系列校や近隣の学校などいわゆる「一般校」で行われる。ところが先行研究を概観すると、研究対象は教員養成系大学学部の附属学校（以下、「附属校」）の小学校段階での教育実習に限定される傾向にある。

附属校と一般校では、実習校の実態及び、実習生の経験に大きな違いがある。附属校は、その存在意義から教育実習に協力的で指導が手厚く、教員・児童生徒の状況が比較的良好な水準にあるなど、実習環境が整備されている。さらに、実習生同士の関わりに関しては、同時期に実習を行う人数が多く 1 名の指導教員が複数の実習生を指導するのが主流であり、実習生同士が学ぶ機会が多いことも推測される。他方、一般校については、各学校が置かれる状況の多様性から、教育実習に対する姿勢、学校・教員・児童生徒の状況も各学校で大きく異なっている。また実習生同士の関わりも、学校規模による実習生の受け入れ人数が制限されている現状から、学校による多様性が大きいことが考えられる。

このように附属校と一般校では教育実習に関するさまざまな事柄に違いがあり、その成果も大きく異なっているはずである。しかし、これまでの研究は附属校に偏っており、教育実習の多様性をほとんど考慮してこなかった。さらに、これまでの附属校の中でも小学校を対象とした先行研究の成果は、初等教員養成に限定されるものであり、その結果を中等教員養成まで含めた教育実習研究の成果と一般化するには問題があった。

## 2．研究の目的

上述のような、教育実習研究の偏りを是正し、教育実習が教員としての資質能力の形成に与える影響を総体的に検討するためには、これまでほぼ未着手であった中等学校教員養成段階の教育実習に注目する必要がある。そこで本研究では、中等教員養成段階の教育実習の主な担い手である一般大学学部が実施する一般中学校での教育実習を対象とし、以下の 2 点について明らかにすることを目的とする。

### （1）教育実習期間中における他者との関わり

公立私立中学校の教育実習の観察を行い、その実態を明らかにする。その際、教育実習生の実

習期間中における他者（指導教員、指導教員以外の教員、生徒、その他の実習生）との関わりに注目する。

## （２）教育実習の多様性と教員の資質の力の形成に与える影響

一般大学学部の実習経験者を対象とした質問紙調査から、教育実習の多様性と、教育実習が教員としての資質能力の形成に与える影響について明らかにする。教育実習の多様性については、授業実習や SHR・LHR の時間数、授業実習以外の活動頻度など具体的な活動時間や頻度について扱う。

## ３．研究の方法

### （１）教育実習期間中における他者との関わりに関する調査

教育実習期間中における他者との関わりを把握するための調査は、兵庫県、山口県、福岡県、宮崎県にある一般中学校 4 校、そして比較対象として中国地方に在する教育学部附属中学校 1 校で行った。観察対象者は計 8 名。調査では、対象者 1 名の出勤から退勤までを観察し、誰といかなる関わり方をしているのかを把握した。さらに観察対象者 1 名に対して、教育実習後インタビュー調査を行い、観察実習で得た知見の補完を行った。

### （２）教育実習生の経験・意識に関する調査

一般大学学部の実習経験者に対して、経験と意識をたずねる質問紙調査を行った。対象者は、全国 28 大学学部の 294 名である（調査の時期は、2018 年 6 月～12 月）。調査では、教育実習の経験として、HR 担当学年や期間中の主な控え場所、母校実習か否か等の実習に関する基本的事項の他に、実習中の活動の有無や頻度（対面式・お別れ会の実施、講話時間数と内容、授業観察の時間数、授業実習の回数（教科・道徳）、指導案の作成頻度、研究（査定）授業の回数、反省会の実施、SHR・LHR の回数、特別活動に関する活動等への関与頻度）や実習前の活動（教育実習に向けた準備、学校体験活動への参加）さらに関わった他者に関すること（他の実習生の有無及び人数、指導教員の人数、指導教員・指導教員以外の教員・他の実習生・生徒との関わり）実習を通して身につけたと感じる能力（授業に関する能力、社会人として必要な能力、教員として必要な能力）教職志望意識の変化についてたずねた。

## ４．研究成果

### （１）教育実習期間中における他者との関わりに関する調査の結果

教育実習観察から、指導教員、指導教員以外の教員、他の実習生、生徒それぞれとの関わりについて知見を得た。指導教員からは、授業に関する指導のみならず、生徒指導に関することや教師としての心構え、指導教員の教職への思いが伝えられていた。実習生に対する指導は、指導教員以外の教員からも行われていた。他の実習生との関わりでは、お互いの授業を見て学びあい、悩みや不安を話しアドバイスを得る機会となっていた。生徒との関わりは、授業を離れた休憩時間や昼食時、掃除の時間、放課後に話をしている姿がみられた。休憩時間や放課後には生徒から実習生に近寄り授業やプライベートなことを話しかける様子が確認できた。他方、実習生にとっても、生徒との関わりは他の先生の授業の進め方や生徒の名前の読み方などの情報を乳する機会としていた。

指導に関わる指導教員以外の教員との関係性は、教育実習生の在学中の関わりや実習教科、実習生の控え場所、授業実習の参観が関係していた。特に、授業実習の参観が指導教員以外の教員と教育実習生をつなぐ要因となる場合には、指導教員による指導が重要なものとなっていた。す

なわち指導教員は、実習生の授業を参観した教員をチェックし、授業後に実習生に知らせ、お礼を伝えるとともに指導を受けてくるようにと指導している。実習生と指導教員以外の教員をつなぐことも、指導教員の役目の1つになっているといえよう。

## (2) 教育実習の多様性と教員としての資質能力の形成に与える影響に関する調査の結果

一般大学学部の実習経験者に対する教育実習の実態と意識に関する調査の結果から、以下のように1)教育実習の多様性、2)教育実習中に関わる他者との関係、3)教員としての資質能力の形成に与える影響について分析を行った。

### 1) 教育実習の多様性

分析の結果、一般学校で行われる教育実習は多様性が高い活動であることがわかった。教育実習の中心的な活動である、授業実習・SHL・LHRで、それぞれの実施回数の分布を分析した結果、授業実習回数で最も値が高いのは、「6-10回」の25.5%と、全体の1/4でしかなかった。以下「11-15回」21.0%、「16-20回」18.3%、「1-5回」(17.0%)と続く。SHRは、「26-30回」の値が23.8%と最も高かった。しかしここでも値は全体の1/4程度であり、以下「16-20回」19.9%、「6-10回」15.0%、「11-15回」12.6%と続き、「0回」も2.1%存在していた。SHRが「0回」、すなわち担当した経験がない者が存在することに驚くが、LHRでは「0回」と回答した者の値は一層増加する。LHRの活動回数を尋ねた結果では、「0回」が最も値が高く54.2%と半数を超えていた。残りの48.8%を占めるLHR経験者の回数は「1回」から最高値の「18回」までと幅があった。

授業実習以外ではその活動頻度に偏りがみられた。各活動に「頻繁に携わった」と回答した値に注目すると、「清掃指導」と「給食指導」では、70~80%程度を占める一方で、「児童生徒の提出物の点検」、「学校行事」、「担当HRの学級経営」、「部活動」は約40~30%と半数に満たず、「生徒からの相談事」は17.2%と20%未満であり、「保護者の対応」に至っては0.3%であった。

### 2) 教育実習中に関わる他者との関係

教育実習中に関わる他者との関係を、指導教員、指導教員以外の教員、生徒、他の実習生に注目して分析した結果、実習生は関係が良好であり、実習の遂行に十分な環境にあったことを認識していることがわかった。例えば、指導教員との関係をたずねた項目のうち、「指導教員と良く雑談をした」、「指導教員は、いつもにこやかに接してくれた」という指導教員とのコミュニケーションに関する項目や、「指導教員の指導は、丁寧だった」、「指導教員は、自身の教育経験を話してくれた」といった指導に関する項目、「指導教員は、指導教員以外の先生たちと関わる機会を作ってくれた」、「指導教員は、児童生徒と関わる機会を作ってくれた」という実習中に関わる他者との橋渡しの役割に関する項目で「とてもあてはまる」の値が半数を超えていた。

### 3) 教員としての資質能力の形成に与える影響

教員として求められる資質能力が教育実習を通してどの程度身につけられたかをたずねた結果によると、授業に関する能力では、設定した19項目中「とても身についた」の値が50%を超えたのは、「授業中に児童生徒の前で話をする力」のみであった。実習は、実習生にとって授業中生徒を前にして堂々と話をする力を養う場になっていた。他方、評価に関する能力や、生徒に対応した授業を行う能力を高める機会にはなっていなかったようだ。評価に関する項目(「評価の視点を設定する力」、「自分の授業を評価する力」)や、生徒に対応する力に関する項目(「児童生徒の理解度に合わせて授業を進める力」、「授業中に学級をコントロールする力」)の値は、10%台にとどまった。

社会人として必要な能力(13項目)では、いずれの項目も「とても身についた」の値は50%

未満であり、教育実習は社会人としての能力を積極的に高める場所となっていなかったことがうかがわれる。そのような中でも主体性、規律性、実行力、傾聴力、課題発見力、分析力を身につけたと感じる傾向にあることがわかった。「とても身についた」の値に注目すると、「物事に進んで取り組む力」、「社会のルールや人との約束を守る力」、「目標に向かって確実に行動する力」、「相手の意見を丁寧に聞く力」、「意見の違いや立場の違いを理解する力」の値は、40%台を占めていた。

教員として必要な能力に関しては、対生徒に関する力や教員としての使命感が高まったと感じていることがわかった。対生徒に関する項目（「児童生徒に興味・関心をもつ力」、「児童生徒を理解しようとする姿勢」、「児童生徒に対する愛情」、「児童生徒を理解しようとする気持ち」）や、教員としての使命感に関する項目（「教員として課された任務を果たそうとする気持ち」）は、「とても身についた」の値が 50%を超えていた。その一方で、学級経営力の獲得意識は相対的に低いことが看取される。すなわち、「学級づくりの力」の「とても身についた」の値は 22.0%にとどまった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

櫻田裕美子 2019,「教育実習における経験 - 「教育実習生の経験・意識に関する調査」から - 」『宮崎産業経営大学研究紀要』29(2), 45-63 頁(査読なし)。

櫻田裕美子 2019,「教育実習に係る活動と実習中の他者との関わり及び教育実習の効果 - 「教育実習生の経験・意識に関する調査」から - 」『宮崎産業経営大学教職課程年報』12, 21-33 頁(査読なし)。

櫻田裕美子 2017,「一般学校における教育実習研究に関する予備的考察」『宮崎産業経営大学教職課程年報』10, 15-21 頁(査読なし)。

〔学会発表〕(計1件)

櫻田裕美子 2018年9月30日,「一般大学学部における教育実習の多様性と効果 - 中学校に注目して - 」, 日本教師教育学会第28回大会, (於)東京学芸大学。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。